

# 花で伝える伝統文化

● 池坊 由紀

そのシンプルな生花の前になぜか大勢の人が集まっていた。台湾でのデモンストレーションが終わった時のことだ。デモンストレーションでは通常、一時間から一時間半の中で〇〇作程度、大中小さまざまないけばなをいけ、披露する。内容も古典的なものから、現代的なものなど多彩だ。その時もいろいろいけたのだが、この種類の花材しか使っていない、しかも本数も決して多くない生花がこれほど人気だとは、意外だった。

海外でいけばなのデモンストレーションをする場合は、いろいろなことに気を遣う。まず使う草木の種類が日本ほどは、多く手に入らない。花屋さんはまさしく花屋さんであって、いけばなにとつて重要な枝や葉には不足する。いけばなの美意識は、花と共に葉を見て美を感じるところから始まっている。緑という、どんな色にも合う、どんな形にも合う万能の存在があつてこそ、はじめて花が生かされ、また共に用いることによつてそこに美しい対比が出来、世界が深まる

のだ。従つて、花屋さんに葉がないなら野山に分け入つて採つてきたりもする。

また海外の方に親しみを抱いてもらえるような工夫も必要だ。日本の花を持ってきて日本からの器を使つていけるだけでは、ショーとして楽しく印象的であつても、では自分たちがやつてみようという意欲には結びつきにくい。むしろその行く先々にある花で、時には器などもその国の土産の焼き物や漆製品等を活用していく。その国の民族性、宗教性や生活環境を尊重しながら無理のない方法でいけばなならではの美意識や哲学を理解してもらおう。が時としてその思いが強くなりすぎて反省することもある。盛り沢山のフラワーアレンジメントに雰囲気近いいけばな作品が好まれるだろうと勝手に推察していたことがあつた。が実際は、古典的な作品が好まれた。表面的なことだけを似せても繕つたことはすぐに見抜かれてしまう。

各々の国が各々の自然環境の中で育んできた文化や伝統があり、それを誇りにしているよう

に、日本人は日本の文化や伝統をゆがめることなく伝えていかなくてはいけないのだろう。相手を理解しようと努め、心を寄り添わせることと、中途半端に表面的に相手に迎合することは、全く異なるのだ。私たち日本人がいかに正しく澄んだ心で日本を捉えられているか、そしてその像をどのような形で海外に発信出来ているのか、一枝一枝挿すたびに間に問われているような気がしてならない。

\*池坊いけばなには、立花りつぎ、生花しょうぶ、自由花じゆうぶの様式があり、生花は草木の出生を重んじ、三つの柱で構成する。



イラストレーション：栗岡奈美恵

いけのほう ゆき／華道家元池坊次期家元。伝統文化発信についてのワークショップへの参加や講演など、いけばなの心をとれて多彩な活動をおこなっている。